

今回は、弟子たちがイエスはなぜ刑死しなければならなかったのかという「謎」を解明する鍵を、『イザヤ書』から見つけ出したことについてみていきましょう。

☛ 『旧約聖書』の光に照らされて (1)

弟子たちはこの時まで『イザヤ書』の次の部分を読んでいなかったはずはありません。しかしあらためてイエスの生前の言動を重ねて読み直してみると、まったく新たな読解ができることがわかったのです。それはどんなことだったのでしょうか。

それでは『イザヤ書』52～53章を、^{あめみやさとし}雨宮慧先生に手伝っていただきながら読んでいきましょう。この箇所は特に、〈苦難の僕^{しもべ}の歌〉と呼ばれています。(/ は『聖書』では改行されている部分を表します。)

【52章】

13 見よ、わたしの僕^{しもべ}は栄える。 / はるかに高く上げられ、あがめられる。

14 かつて多くの人をおののかせたあなたの姿のように / 彼の姿は損なわれ、人とは見えず / もはや人の子の面影はない。

15 それほどに、彼は多くの民を驚かせる。 / 彼を見て、王たちも口を閉ざす。 / だれも物語らなかつたことを見 / 一度も聞かされなかつたことを悟ったからだ。

【53章】

1 わたしたちの聞いたことを、だれが信じえようか。 / 主は御腕^{みうで}の力を誰に示されたことがあろうか。

2 乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のように / この人は主の前に育った。見るべき面影はなく / 輝かしい風格も、好ましい容姿もない。

3 彼は軽蔑され、人々に見捨てられ / 多くの痛みを負い、病を知っている。 / 彼はわたしたちに顔を隠し / わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。

52章13～15節の語り手は〈神〉です。13節の『わたしの僕^{しもべ}』という表現は『第二イザヤではいつも神が使う言葉』(雨宮先生)だからです。『見よ、わたしの僕^{しもべ}は栄える』と語り始めた神は、彼^{しもべ}は人の子の面影がないほどに傷つけられた姿になるけれど、その彼が『高く上げられ、あがめられる』といいます。なぜなら、多くの民や王たちが口を閉ざすような驚くべき出来事が起こるからだ — と。それはどんな出来事なのでしょう。

53章から語り手は「わたしたち」に代わり、2～3節で僕^{しもべ}が「わたしたち」の間に姿を現したときのような書かれています。それは、かつて見たような顔つきや姿かたちではなく、人々から軽蔑され、無視された人だったと語ります。

『贖罪』としての僕^{しもべ}の死

4 彼が担ったのはわたしたちの病 / 彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに / わたしたちは思っていた / 神の手にかかり、打たれたから / 彼は苦しんでいるのだ、と。

5 彼が刺し貫かれたのは / わたしたちの^{そむ}背きのためであり / 彼が打ち砕かれたのは / わたしたちの^{とが}咎のためであった。 / 彼の受けた懲らしめによって / わたしたちに平和が与えられ / 彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。

6 わたしたちは羊の群れ / 道を誤り、それぞれの方向に向かって行った。 / そのわたしたちの罪をすべて / 主は彼に負わせられた。

わたしたちは、彼がかつての姿かたちが変わるほどの苦しみを受けたのは、「彼自身の罪のゆえ」に神に裁かれ打たれたのだと思い込んでいた — 。つまりその苦しみは「因果応報的」なものであると考えていたわけです。しかしそれは全くの誤りであり、彼が担ったのは「わたしたちの病であり、痛み」であり、自分たちが彼を誤解していたのだ — というのが4節です。

さらに5節では、彼が刺し貫かれ打ち砕かれたのは「わたしたちの背きであり咎のため」だったと、苦しみの「原因」を記しています。そして、彼の苦しみによって「わたしたち」に「平和といやし」が与えられたと理解したのです。ここでは「苦難」の意味が、まったく新しく捉え直されていることがわかります。しかも、迷える羊であるわたしたちが神から離れていく道を選んだという罪を、すべて彼に背負わせたのは神であり、それは「神の^{みむね}御旨」であった — と6節で語られます。

雨宮先生はこの4～6節が最も重要な箇所であると書いておられます。〈^{しもべ}僕〉は、「私たちの罪、^{とが}咎を背負って」殺されることによって、多くの人に「平和」と「いやし」を与えられた — という〈^{しよくざい}贖罪〉行為としての^{しもべ}僕の死が書かれているからです。「贖罪」— 聞きなれない言葉だと思います。キリスト教信仰にとって重要な言葉なので、次回で詳しく書きます。

7 ^{くえき}苦役を課せられて、かがみ込み / 彼は口を開かなかった。 / ^{ほふ}屠り場に引かれる子羊のように / 毛を切る者の前に物を言わない羊のように / 彼は口を開かなかった。 /

8 捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。 / 彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか / わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり / 命ある者の地から絶たれたことを。 /

9 彼は不法を働かず / その口に偽りもなかったのに / その墓は神に逆らう者と共にされ / 富める者と共に葬られた。 /

10 病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ / 彼は自らを^{つくな}償いの^{きさき}献げ物とした。 / 彼は、子孫^{すえなが}が未永く続くのを見る。 / 主の望まれることは / 彼の手によって成し遂げられる。 /

7～10節は、^{しもべ}僕が「わたしたち」の間から取り去られるときのようすが書かれています。^{しもべ}僕は苦難を受けても、それに対する憤懣や抗議の言葉も発せず捕らえられ、裁きを受けて殺され、神に逆らう者と一緒に葬られました。しかし、彼の苦しみは「主(神)の望み」であり、主の望まれることが彼によって成し遂げられた — として、「わたしたちの告白」は閉じられます。

11 彼は自らの苦しみの実りを見 / それを知って満足する。 / わたしの^{しもべ}僕は、多くの人が正しいものとされるために / 彼らの罪を自ら負った。 /

12 それゆえ、わたしは多くの人を彼の取り分とし / 彼は戦利品としておびたしい人を受ける。

/ 彼が自らをなげうち、死んで / 罪人のひとりに数えられたからだ。 / 多くの人の過ちを担い / 背いた者のために執り成しをしたのは / この人であった。

11 節から、再び語り手は「神」になります。「わたしの僕」は多くの人々が正しい者にされるために、彼らの罪を自ら背負っていのちを落とします。彼は神に背いた者のために、神との関係を修復する仲立ちをした — と語り、〈苦難の僕の歌〉は締めくくられています。

〈苦難の僕〉とはいったい誰か？

52 章の最後の部分から 53 章までを読みました。初めてこの箇所をお読みになった方もいらっしゃると思います。「僕」あるいは「彼」という言葉が何度も出てきました。この〈僕〉とは、いったい誰のことなのでしょう。

「僕とは誰を指すのか？」— この問題についてはこれまで多くの人々が長い時間をかけて、さまざまな考え方を提示しています。大島力先生(青山学院大学教授)は、代表的な説としては次の三つがあるとしています。

- (1) 集団説 (イスラエル民族)
- (2) 個人説 (モーセ、エレミア等の預言者、第二イザヤ自身)
- (3) メシア (救世主) 説

『これらが実に様々なヴァリエーション(変化・変形)を伴って提唱されてき』て、多くの解釈者は〈メシア説〉をとっていると書いておられます。

ここで何人かの先生方のお考えをみていきましょう。

遠藤周作氏は『キリストの誕生』のなかで、「わが僕」とは当時の律法学者が教えていたように、異邦人によって長い間征服され虐げられてきたイスラエル民族を指すのだと思っていた弟子たちは、いまやこの「わが僕」に、『イエスその人を見つけた』、『イエスの生涯と受難と死との跡をたどるものを見た』と書いています。

もう一度『苦難の僕』を読み直してみましょう。たとえば 53 章 7 節に、『屠り場に引かれる子羊のように / 毛を切る者の前に物を言わない羊のように / 彼は口を開かなかった』とありました。ピラトがいろいろと尋問したときに「回答拒否」の態度をとったイエス(第 45 回参照)を思いうかべた方もいらっしゃるでしょう。

また、8 節の『捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた』という箇所は、イエスが長老や律法学者たちによって捕らえられ、ピラトのもとで裁判にかけられ、十字架上で殺されたことを指しているのでは … と受けとることができます。

雨宮先生はどうお考えでしょう。第二イザヤと呼ばれる預言者がこの箇所を書いたとき、最初からイエスを予告しようとしたのではないのではないかと書かれています。そうだとすれば、僕とはいったい誰か。先生は『預言者的な生き方を究極にまで推し進める理想の預言者ではないか』と考えます。第二イザヤはさまざまな苦しみを与えられても逃げず、それを果敢に担うためにこの歌をつくり、『預言者の苦しみには意義があると自分に言い聞かせてい』ると受けとっておられます。『このような第二イザヤに対して、神はイエスによって答えたのではないか』とされます。彼にはイエスを予告する意図はなかったけれど、結果的にそうなったのだということです。

もう一人の先生のお考えをご紹介します。

（「僕」はイスラエル民族か、民族中の信仰的遺残者か、エレミアのような悲哀の預言者か — としたあとで）『若し個人として見れば、イエス・キリストほどこの歌に適合した人はあり得ない。それは一言一句、生き生きとイエス・キリストの生涯と十字架と復活を予表する。誠に或る古き註解者の言へる如く、イザヤ書第五十三章はキリストの十字架の下に於いて読む時最もよくその精神を味ひ得るであらう』。

これは、無教会主義キリスト教を唱えた内村鑑三師 (1861-1930) の弟子にあたる矢内原忠雄先生 (1893-1961、東京大学教授～総長。) の著書からの引用です。矢内原先生は、わたしの大学時代の恩師・杉山好先生 (第3回参照) の先生にあたります。内村師が開いた無教会主義の集会には、東京帝国大学の学生だった塚本虎二 (1885-1973)、著書に岩波文庫版の福音書、全集などあり)、南原繁 (1889-1974、政治学者、東大総長。丸山眞男に影響を与えた)、関根正雄 (1912-2000、旧約聖書研究者、著書に岩波文庫版の『旧約聖書』翻訳、全集などあり) 氏ら、伝道者・聖書学者の錚々たるメンバーが参加していたといえます。

この稿を書くにあたって、聖書の研究者の方々や大学の先生方の著書を何冊か読みました。でも専門的すぎて、〈入門編〉としてはちょっとムズカシイなあ … と思われました。そして何となく書棚を見ていると、矢内原先生の『聖書講義』全8巻のすっかり茶色に変色してしまった箱入り全集が目にとまりました。「1978年6月22日 第1刷発行」とあり、今から38年前に購入したものです。何冊かに数ページ読んだ形跡があった程度で、ほとんど手にしていなかったこととなります。「積ん読」(「積んでおく」)も決して無駄にはならないんですネ。

それはともかく、多くの先生方は『イザヤ書』53章がその後の原始キリスト教団の教義作成に大きな影響を与えたと考えておられることがわかりだと思えます。

〈僕〉が誰であるかはともかく、弟子たちをはじめとする初代教会の人々にとって「謎」だったイエスの十字架上の死が、じつは神の永遠の救済計画の中に含まれ、旧約聖書でも予言されていた出来事として了解しなおされます。

こうして「苦難の僕」の歌は、『イエスの死は自分たち、つまり、そう読み直しつつある弟子たちが父祖伝来の戒め(モーセ律法)に違反して犯してきた多くの罪(複数)をイエスが代わりに担ってくれた出来事、すなわち贖罪の死として受け取り直される』(大貫隆先生) こととなります。

「贖罪としての死」— キリスト教の信仰にとって、また重要なことがらが出てきました。なぜイエスの死が私たちの救いにつながるのか? 次号で考えていきましょう。

【引用・参考にした書籍】

- ・兩宮 慧『旧約聖書の預言者たち』(日本放送出版協会 NHK ライブラリー、1997)
- ・矢内原忠雄『聖書講義Ⅶ イザヤ書 第二イザヤ書 第三イザヤ書』(岩波書店、1978)
- ・大貫 隆『イエスという経験』・山我哲雄『キリスト教入門』・『岩波 キリスト教辞典』
- ・百瀬文晃『キリスト教の本質と展開 キリスト教概説[Ⅱ]』
- ・新共同訳『新約聖書』 ・遠藤周作『キリストの誕生』